二次元ドリームノベルズ15
サンダークラップス!
淫獄の四天使
小説 羽沢 向一
挿絵 カワギシケイタロウ
試し読み版

プロローグ　地獄解放（アンダーワールド・アンチェインド）　006
第一章　雷鳴美女、出撃せよ！（サンダークラップス・トゥギャザー）　023
第二章　姉妹ゆえの罪（シンズ・オブ・シスター）　057
第三章　正義が堕ちる夜（ファイナル・ナイト・オブ・ジャスティス）　094
第四章　人外の凌辱（ノーマンズ・プレイ）　153
第五章　混沌の未来（ケイオス・キングダム・カム）　185
第六章　審判の形（デイール・オブ・ジャッジメント）　236
エピローグ　終わりなき闘い（ネバーラスティング・バトル）　258

登場人物紹介

Characters

フレア　本名「日向燦（ひゅうがきらら）」
サンダークラップスの一員。その能力は超一流。出自に関する秘密を持つ。

スターサンダー　本名「鈴堂麗（りんどうれい）」
サンダークラップスのリーダー。個性の強いメンバーのまとめ役。電流を自在に操る。

ローズデバイス　本名「北原静子（きたはらしずこ）」
サンダークラップスの一員。体内にナノマシンを宿した少女。ハイテクアーマーに身を包み戦う。

オセロット　本名「柳（やなぎ）・イザベラ・美果（みか）」
サンダークラップスの一員。強力な魔術を操るシャーマン。戦闘時は山猫の獣人に変身する。

ドクター・ディスオーダー
フレアとの因縁浅からぬマッドサイエンティスト。刑務所に入っていたが、脱走する。

エクリプス
ドクター・ディスオーダーに造られたオフビートで、博士を脱走させた張本人。フレアを敵視している。

ジョイ・ディヴィジョン
強大な魔力を持つアラビアの精霊（ジン）。ドクター・ディスオーダーと同時に脱走したオフビートの一人。

第二章　姉妹（シンズ・オブ・シスター）ゆえの罪

『国際水泳競技連盟はフェアプレイの精神を守るため、水中で呼吸が可能な人間の公式試合への参加を今後は禁止する』

（一九六一年　ロリー・レマール選手への試合出場禁止措置に関する公式発表より）

この発表の直後に、ロリー・レマールは初の女性スーパーヒーロー水の天使（アクアエンジェル）として活動することを宣言した

東京芸術劇場の前の池袋西口公園では、異常で悲惨な光景がくりひろげられていた。

何台もの自動車が建物につっこみ、ひっくりかえる公園を、大勢の人間が悲鳴の合唱を上げて逃げまどっている。まるで飢えた鮫たちに飛びこまれた小魚の群れのように、人々は右に左に必死に走り、互いにぶつかり、あちこちで転んだ者に足をひっかけて次々と転倒する。

人々をパニックに陥れているものも、また人間の形をしていた。古めかしいタキシード

やモーニングを着て、蝶ネクタイをしめた紳士たち。
紳士の顔の表面は木目もあらわで、ガラス玉の眼球が埋めこまれ、ペンキで描かれた口が歯を剥いて笑っている。
あきらかに木製の人形だ。
中に機械が仕込んであるのか、木の人形たちは虚ろな笑みをふりまいて、逃げ遅れた人の背中に腕を振りおろした。タキシードのそでからのびる木の指の先端には、金属製の長い爪が凶々(まがまが)しくきらめいている。
近くの派出所から警官が駆けつけて拳銃を抜いたが、このパニック状態の中では発砲は不可能だった。警官たちは逆に群衆のパニックに呑みこまれてしまう。
ナイフの爪が青年の肉を切り裂き、血飛沫を散乱させる。返り血に笑顔を赤く染めた人形の一体が、飽くことなくガラスの眼球を新たな獲物に、母親とはぐれて泣きじゃくる男の幼稚園児に向けた。左手の爪の一本を幼児のシャツのえりに突き刺し、ギクシャクした動作で小さな身体を軽々と持ち上げる。
血塗られた木製の顔の前で宙づりになった幼児に向けて、人形の右手の爪が構えられる。
混乱の中でようやく自分の息子を見つけだした若い母親が、突き飛ばされながら恐怖の悲鳴をほとばしらせた。

「助けて。誰か、正也（まさや）を助けてっ！　お願いっ！」
母の願いに応えられる者は、地上にひとりもいなかった。
応答は、空から飛来した。
幼児をつかむ人形の頭頂に、上空から純白のブーツのつま先が落ちた。
悲鳴のかわりに乾いた破壊音を鳴らして、人形の頭から胴体が粉々に砕け散る。放り出された幼児を、空中に浮かぶ白いコスチュームの腕が抱きとめた。
紳士人形たちが動きを止め、首をキリキリと回転させて、たなびく白いケープに視線を集める。
息子を救われた母親の、そして人々の希望の歓声が、広場を満たした。
「フレア！」
「サンダークラップスのフレアだ！」
「フレアが来てくれた！」
日向燦＝フレアは幼児を涙する母親に手渡すと、大声で呼ばわった。
「出てこい、残酷劇（グランギニョール）！」
同時に白いケープとスカートをなびかせて、弾丸のように人々の頭上を飛んだ。
自分が空を飛べる理屈は、フレア自身にもわからない。ただ飛ぼうと思うと、身体の筋

肉を使うのと同じ感覚で空中を移動できるのだ。長時間を飛んだり、速度を上げると疲れるのも同じだ。麗は、燦が無意識に意志の力で重力や慣性を制御しているのではないかと言っていたが。

二十メートル余りを一瞬で移動して、ＯＬを踏みつけていた人形の顔に右の拳をたたきこむ。木の頭が外れて、路面を跳ねる。

「近くにいるんだろう」

また飛んだフレアのキックが、警官にとりついていた人形の背中をへし折った。二つになった人形の胴体の中からは、なんの機械も仕掛けも出てこない。殺人人形たちはロボットでも遠隔操作されているわけでもなく、正真正銘のただの木材だけの人形なのだが、もとより承知しているフレアは驚きもしない。

「わたしが相手になってやる！」

怒りに燃えるフレアの雄叫びに答えて、人形たちが仲間の破壊をものともせず、ギクシャクした動きでいっせいにスーパーヒーローに殺到した。凶器の爪を前にのばし、そろって白いコスチュームに突き立てようとする。

フレアは腕のひとふりで、まとめて木の腕をたたき折った。何本もの人形の腕が乾いた音を立てて、アスファルトの上を転がる。両手をすさまじいスピードでひらめかせ、フレ

アは人形たちを続々と粉砕していく。木片が飛び散り、首が飛び、胴体が割られ、脚がもげる。

人形たちを残らず破壊すると、あらためて敵の名を叫ぶ。

「姿を現せ、グランギニョール！」

芸術劇場の正面扉につっこんでいるクリーム色のプジョーのドアが派手に開き、血まみれの女性が、車内から路面へ転がり落ちた。

ひと目で、女性がどんな凄惨なあつかいを受けたのか、見て取れた。本来なら魅力的な脚線美を描く両脚が、腿の部分からあってはならない形にねじれているのだ。それでも、女性には意識があった。血と涙に濡れた瞳でフレアを見つめ、なにかを伝えようと口を動かす。しかし、洩れるのは途切れ途切れのうめき声だけだ。

女性の胸を、さらに車内から降りたテカテカと光る黒い革靴が踏みつけた。

「やめろ、グランギニョール！　その人を離せ！」

フランス車から悠々とした態度で現れたのは、またしてもタキシードの男だった。

やはり頭は木製だ。髭の濃い悪人面を漫画にしたような顔で、木の眉がカタカタと上下して、木の唇がパクパクと開閉している。

しかし、なめらかで優雅な身のこなしは人間のものだ。生身の人間が、頭からすっぽり

と木の面を覆っている。
フレアが奇怪な男に飛びかかろうとしたとき、グランギニョールの手にしたステッキの先端についたアーミーナイフが、足下の女性の喉に突きつけられた。
「楽しんでくれているかな、フレア君。きみに捕まって、オガサワラ・ザ・ピットに放りこまれてから、一年半ぶりのわがグランギニョール劇団の公演だ」
「その女性を解放しろ。わたしの相手をしたいんじゃないのか」
フレアの怒りの言葉に、グランギニョールは血に赤く染まった左手をひらひらさせて答えた。
「もちろん、私の最高の観客はフレア君だ。きみが劇団の新人に勝てば、この女を殺さないでおいてやる。紹介しよう。グランギニョール劇団の新たなスター、ジル閣下（モンジュール・ジル）！」
プジョーが路面から高く浮き上がった。
地下からのびた二本の木製の太い腕が、外車を軽々と持ち上げる。
腕は、路面を崩して出現した身長五メートル余りのタキシードの人形の肩につながっていた。大きな木の顔には、やはりガラス玉の眼に、ペンキで描いた口。だが口のまわりには箒のような真っ青な髭が植えられている。
フレアは顔をしかめた。

「青髭ジル・ド・レイのつもりか」
ジル・ド・レイとは、百年戦争で聖女ジャンヌ・ダルクの副官を務めた、歴史に名高いフランス救国の英雄である。しかし、ジャンヌ・ダルクが火あぶりにされた後には、ジルは悪魔信仰に耽り、数知れない子供を惨殺したのだ。現在でも、青髭というあだ名とともに、ジルの名は殺人鬼の代名詞として恐れられている。
「なかなか教養があるな。やれ、モンジュール・ジル」
巨大人形は乾いた木のきしみを響かせて、頭上のプジョーを投げた。
クリーム色の車体が風を切って、正面からフレアに飛来する。巨大な砲弾に対するには、純白のミニスカートをひらめかせるフレアの女らしい身体は、あまりに頼りなく見える。
しかしフレアは堂々と豊かな胸を張り、両腕を広げて、一歩も動かない。避ければ、背後で見守る人々に危害がおよぶ。
受けた！
バンパーとぶつかった胸が大きく弾む。すばやく両腕をタイヤの下にまわし、車体をしっかりとつかんだ。
アスファルトについた両足がわずかに後ろに動くが、フレアはその場にとどまった。
もちろんフレアにどれだけ腕力があろうとも、正面から大質量が激突すれば、運動エネ

ルギーで背後へ吹っ飛ばされてしまうはずだ。そうならないのは、自動車を受け止めたのとタイミングを合わせて前方へ飛び、運動エネルギーを相殺しているからだ。

フレアがプジョーを受け止めると同時に、モンジュール・ジルが巨体からは想像できないスピードでダッシュした。

プジョーを路面に降ろしたフレアの目の前に、太い両腕が迫る。伝説の悪名を受け継いだ人形にふさわしいものが、両手から現れた。

右手の指からは、日本刀を思わせる五本の長大な刃がのびる。

左腕の中からは、高速で回転するチェーンソーが出た。

刃が、フレアの右肩に食いこむ。チェーンソーは右の脇腹に入る。白いコスチュームが切り裂かれ、白い布の破片が宙に乱舞した。

だが、そこまでだ。五本の刃は、若い女性特有のみずみずしい柔らかさと弾力を持つ皮膚をわずかにへこませただけで、先に進めなかった。チェーンソーの歯も、肌に食い入ったまま動きを止められてしまう。肉を切るどころか、表皮に傷もつけられない。

「忘れたのか。わたしの身体は、砲弾も跳ね返すし、レーザーでも切断できない。だから」

フレアは両手ですばやくモンジュール・ジルの両腕をつかみ、あっさりと人形の肩から引き抜いた。二本の太い腕が路面に落ちる前に、ケープをなびかせてジャンプする。ブー

ツのつま先でジルの人間の三倍の大きさの顔面を蹴り砕いた。
「おまえのくだらない人形も、おまえの精神を分裂させて木の人形に憑依するオフビート能力も、わたしには意味がない。観念して、その女性を放せ」
「いや、意味はあるのさ。ぼくが精神を集中させる時間を作ってくれたからね」
別の、フレアには未知の声が、どこからか響いた。
「なに！」
周囲を見まわしたフレアの目の前で、すべての光景が一変した。ビルも道路も消えた。夏の青空も失せた。フレアがいる場所はもはや池袋ではない。東京でも日本でもない。この世のどこでもなくなっていた。
頭上も足の下もが不自然に赤く、ぐねぐねと渦巻いている。
大量のペンキを油に垂らしたような空間の中に、さっきまでは存在しなかった人間たちが蠢いていた。
全裸の男女だ。
無数の裸の男女が、ありとあらゆるポーズで肉体を絡ませあっている。唇を重ね、舌を吸い、互いの肉体をまさぐり、性器を結合し、数知れない喘ぎ声と濡れた摩擦音が混交して、淫猥きわまりない合奏を生み出している。

幻覚かとも思ったが、鼻孔をつく生々しい性臭とむっとする熱気は本物のようだ。
「少なくとも、こんな能力はグランギニョールにはないはずだ……」
「いかにも」
と、腰を動かし続ける男女の間から、陽炎（かげろう）のように人影が立ち昇った。
ただひとり衣服を、原色の塗料をでたらめに塗りたくったステージマジシャンの衣装をまとった男が、深々と頭を下げた。
「初めてお目にかかります、フレア様。どうぞ、お見知りおきを。ぼくの芸名は白昼夢者（デイドリーマー）。グランギニョール君とはオガサワラでとなり同士で、とても仲良かったんだ」

☆

「あなたのコードネームは冷戦（コールドウォー）でしたわね」
鈴堂麗＝スターサンダーは冷静な声音で、西部デパートのブックセンターの前に立つ覆面の男に告げた。
男は、顔全体に雪の結晶を描いた布の覆面をすっぽりと被っている。覆面から唯一見える瞳は、きれいなコバルトブルー。たくましい肉体を包む青いコスチュームには筋肉の凹凸が浮かび上がり、やはり雪の結晶が記してあった。
覆面男の背後のブックセンターの壁面は、分厚い氷で覆われている。

「データは読みましたわ。本名はヘルムート・ウルリッヒ。東ドイツ軍の特殊部隊に所属していたが、ドイツ統合の後は雇われテロリストとして暗躍。いわゆる旧共産圏政府崩壊後に世界中に流出した、東側の人間兵器のひとりですわね」
「ならば、オレの力も知っているだろう」
コールドウォーの雪模様の覆面の内から、とがった氷柱のような声が流れた。
「露出の多いコスチュームで男の目を楽しませるのも結構だが、少しは耐寒性も考慮するべきだ」
ドイツ人の両腕が前に突き出されると同時に、スターサンダーの妖艶な肉体が氷に覆われる。たちまち美女の氷像ができあがった。
コールドウォーは両腕を組み、暗い笑いを響かせた。
「たわいない。サンダークラップスのリーダーがこんなものか。んぬ!?」
氷の内部で、スターサンダーのあらわな肌やコスチュームの色が変わった。ニクロム線のように赤熱化しているのだ。コールドウォーが青い目を見開き、再び腕を向けたが、スターサンダーを覆う氷が溶ける速度のほうが速い。
水に濡れた黒髪から蒸気を上げて、スターサンダーは告げた。
「わたくしの身体もコスチュームも、ある程度の電流を流すと高熱を発するんですの。わ

たくしを凍結させることは不可能ですから、おとなしく投降していただくのが得策ですわ」
「オレもこれでメシを食ってるんだ。簡単にあきらめては仕事がなくなる」
「それは残念ですわ」
今度はスターサンダーが右手を上げた。指先から青白い稲妻が飛び、獲物に襲いかかる蛇のように空中をコールドウォーへ向けて翔ける。
だが電光は、突然コールドウォーの前に立ちふさがった黒光りする鉄の壁にさえぎられた。壁は、やたらと横幅の広い人間の形をしている。
「あら、あなたは」
鋳物の鉄の像にしか見えない顔が動き、ニヤリと笑った。
「コールドウォー兄貴には相棒がいると、データには書いてあっただろうがよ」
「えーと。本名はヨハン・ゲーレンバウムでしたわね。コードネームは」
「ドイツ製の鋼鉄人間鉄（アイアン）のカーテン様よ。生きた鉄のこのオレ様には、電撃なんざ効かんぜよ」
スターサンダーは仮面の顔を斜めにかしげた。
「あらまあ、困りましたわねえ」

☆

「正義の味方オセロット、ただいま参上だミャア！」
柳・イザベラ・美果＝オセロットは池袋最高層のビルサンシャイン60の前に駆けつけると、甲高い声で名乗りを上げた。
道路に面したショッピングモールがことごとく破壊され、瓦礫の山と化している。
「ミャア？　そこのヘンテコなヤツ。おまえが壊したのか？」
瓦礫の上に、筋肉隆々のヘンテコな男が腕を組んで、仁王立ちしていた。
身につけているものはたった二つだけ。
ひとつは顔にはめた水中ゴーグル。なぜかガラス部分がサングラスと同じミラーシェードになっている。もうひとつは腰をぴっちりと覆う金ピカのビキニの競泳用パンツ。
オセロットは首をかしげ、耳をピクピク動かし、自分が全裸なのを棚に上げて言った。
「なんだ、その格好。おまえ、露出狂か」
金の海パン男は腕をほどかずに、堂々と宣言した。
「おれの名はタイドプール。チビ猫よ、かかってこい」
あまり複雑なことを考えられないオセロットの頭の中で、目の前の海パン男と挑発ポーズを取る格闘ゲームのキャラクターが重なった。悠然とした態度が、神経を逆なでにする。
「オセロットをなめると、痛い目に会うんだからな！」

両手の野獣の爪をのばすと、オセロットは路面を蹴った。人間には不可能な速度で、タイドプールまでの数メートルの距離をひと跳びでつめた。

右手の爪が、タイドプールの厚い胸に突き刺さった。

「ミャア⁉」

ズブリ、と右腕が肘までタイドプールの胸の中に潜りこむ。まるで大きなゼリーに腕をつっこんだ感触だ。

「馬鹿め。まったくおれのことを知らんようだな」

タイドプールがオガサワラ・ザ・ピットに収監されたのは一年三カ月前。オセロットが日本にくる以前だ。居候している麗の家のコンピューターには、多数のオフビート犯罪者のデータがそろっているのだが、それに目を通すオセロットではなかった。

向かい合う二人の足下で、瓦礫が揺れた。

「ミヤッ！」

瓦礫の下から、水が噴出した。オセロットの目の前で、タイドプールの肉体も水と化して溶けこむ。オセロットはあわてて水から逃れようとするが、水中に入った右腕はびくともしない。

「ミャアアアアアアアーーーーーーーーッッ⁉」

水柱が一気に上空に昇った。地上六十階のサンシャイン60の屋上と同じ高さにまで、オセロットの身体が運ばれる。下に目をやると、もう路上駐車した自動車がミニカーにしか見えなくなっている。

水柱の頂点が膨らみ、再び水中ゴーグルつきのタイドプールの上半身を形作った。

「いかに猫女でも、この高さから墜落して、無事ではすまんだろうな」

オセロットは自由になる左手と両脚としっぽをふりまわしてわめいた。

「や、やめろ！　ボクを殺す気か！」

「その気だ」

水柱から横向きに水が噴出した。オセロットは胸を強烈な水圧で押される。

オセロットの身体が水柱を離れ、空中をくるくると舞う。そして、はるか下方のアスファルトの道路へ向けて、一直線に落下をはじめた。

☆

池袋駅西口にやたらと目立つ激安カメラ店のビルの六階が、大きく爆発した。

逃げまどう大勢の通行人の頭上に、吹き飛んだコンクリートの破片と窓ガラスと店内のOA機器が雨あられと降りそそぐ。

逃げ遅れた若い母親が、せめて幼い娘だけでも助けようと、小さな身体を胸に抱いてしゃ

がみこんだ。杖をついた老人が、突き飛ばされて腹ばいになる。その身体につまずいて、女子高校生が転倒してしまう。ふり仰いだ絶望の瞳に、自分に目がけて落下する巨大なコンクリートの塊が映った。

白いセーラー服の女子高生は、人生最後になるはずの悲鳴をほとばしらせた。

と、死を覚悟した目を、きらめく緑色の輝きが射た。

コンクリートの塊が、鋭いガラスの雨が、パソコンやワープロが、空中で静止する。

女子高校生は、老人は、そして母親の身体から顔を覗かせた幼児は、自分たちを救ったスーパーヒーローの名を歓呼した。

「薔薇の装置（ローズデバイス）！」

歩道で見上げる人々と落下する瓦礫の間の空中に、エメラルドグリーンに輝く鎧（アーマー）が浮いている。

アーマーは成熟した女性の美しいボディラインをかたどっていた。全身が金属光沢のある緑色だが、膨らんだ胸もとだけルビーの輝きを持つ薔薇の浮き彫りで飾っている。

アーマーに身を包んだ北原静子＝ローズデバイスは下に人がいなくなったことを脳に直結した後部モニターで確認すると、展開していた空間固定フィールドを消そうと考えた。アーマーは静子のナノモジュールの神経系と接続しているので、自分の手足を動かすのと

同じ感覚で操作できる。思考に反応して、アーマーの胸に内蔵されたフィールド発生装置のスイッチが切れた。

瓦礫がいっせいに路面に落ちる音に混じって、命を助けられた女子高生の声が聴覚モニターから入った。

「ローズお姉さん、ありがとう！」

半年前にサンダークラップスの四人目の新メンバーとしてヒーローデビューしたときに、ローズデバイスはロボットではなく、中に生身の女性が入っているとだけマスコミに発表した。もちろん声は機械を通して変えてある。世間では、アーマーの外見から二十代半ばのグラマーな女性だと思われていた。

静子の肉体を包むアーマーは、もともと亡き父が開発をはじめたものを、静子自身が受け継いだものだ。アーマーを製作してどうするつもりもなかった。ただ父の研究を完成させたかっただけだ。結局は、叔父のもとから逃亡するために使うことになってしまった。

麗からサンダークラップスのチームメイトにならないかと言われて、初めて自分の身体とアーマーを使えばスーパーヒーローになれると思い至った。

もともとは武骨だったアーマーのデザインも、麗にヒーローらしくしてほしいと言われて、現在の華麗なものに変えた。

胸の薔薇は、テレビで見たアニメのヒロインの影響だ。胸に薔薇の花を飾り、自分が信じるもののために剣で戦う凛々しい少女の姿に感銘を受けて、機能的には無意味な薔薇をつけたのだ。

ローズデバイスは両足の裏からジェットを噴射して、ビルの壁面に空いた大穴に向けて上昇した。アーマーのセンサーが爆発の被害を調べ、火薬の反応がないことを脳に伝える。

「なにかのエネルギーで、え⁉」

ビルの中から光の球が飛び出し、ローズデバイスの胸に触れた。

爆発！

光球が一瞬で膨れ上がり、膨大なエネルギーが四散する。直撃を受けたローズデバイスは池袋駅東口前の六車線の道路の上を斜めに吹き飛ばされ、向かい側のビルの壁面を飾る大型テレビに激突した。衝撃吸収システムが静子の肉体を守ってくれるが、アーマーの破損部分の報告が次々と脳に入ってくる。人間にはとても処理しきれない情報量だが、ナノモジュールの脳が的確にデータを振り分ける。重要な情報だけが、静子の意識にまわされた。

「行動には支障なし。今の攻撃のパターンは……」

意識の表面に、様々なオフビート犯罪者のデータが高速で走る。ひとつの映像が、意識

にとどまった。
　上半身、特に肩幅がやたらと大きい不自然な体型の男だ。あきらかに肉体の改造を施されている。それを証明するように、両肩や背中の肩甲骨のあたりから、皮膚を貫いて金属の棒が何本も突き出ていた。
「通称、爆心地（グランド・ゼロ）。オガサワラの脱獄者だわ」
　データと同じ容姿の男が、ビルの穴から姿を現した。分厚い胸板を『爆』と大きく記した黒いランニングシャツに包み、下半身にはジャングル迷彩のズボンを穿いている。
　データとは少し違い、目が機械化されている。脱獄してからさらに改造手術を受けたのだろう。
　グランド・ゼロが、幅の広い厚い唇からザラついた声を出した。
「サンダークラップスのアーマー女か。牢屋の中でも噂は聞いてたぜ」
「ローズデバイスといいます」
　と、ついていねいに答えてから、またやっちゃったと眉を寄せた。燦さんやベルさんみたいに、毅然とした態度で犯罪者に向かわなくてはいけないのに……これじゃ、またテレビでからかわれちゃう……。
「そのブリキの衣装の中は美人だと評判だが、本当かどうか、俺が裸にむいてやる。つい

でに、俺のぶっといダイナマイトでいい思いをさせてやるぜ」
げ、下品すぎる！
ローズデバイスはアーマーの中で悲鳴を上げた。
こんな下品な男なんか、相手をするのもいや。ああ、アーマーに空気濾過装置をつけておいて本当によかった。下品な吐息を吸わなくてもすむわ……。
「その前に、この俺がグランド・ゼロと呼ばれる理由を教えてやるぜ」
グランド・ゼロが肥大した肩をゆすると、肩や背中から生えた金属の突起がさらに長くのびた。突起の先端に、光の球が咲く。
「喰らえ！」
光球がそろって突起を離れ、蛍のように空中を舞った。それだけなら世にも美しい光景だ。だが、光球は明らかな敵意を持って、ローズデバイスに向かって高速で飛来してくる。
ローズデバイスがとっさにエメラルドグリーンに輝く身をひねると、一瞬前に右肩のあった場所に光球のひとつが触れた。
爆発！
砕けた大型テレビがさらに大きくえぐれた。
光球は次々と、ローズデバイスを襲ってくる。

爆発！　爆発爆発爆発!!

光球の三分の一はかわした。道路や自動車に触れ、すさまじい破壊をふりまく。幸い、人々はすでに逃げていたので被害者は出ない。

ローズデバイスは道路の上を飛行しながら、アーマーの両腕に内蔵したレールガンから鎮圧用のゴム弾を連射した。光球の三分の一が撃たれて破裂する。

残る三分の一のエネルギー兵器が、アーマーの表面で威力を発揮した。装甲の細かい破損や機能の異変が、脳へ洪水のように流れこんでくる。

飛行中の姿勢制御を失い、ローズデバイスは頭から道路の中央分離帯に立つブロンズ像につっこんだ。男女二人が不思議な形で躍動する彫像が台座からはずれ、道路に転がる。

姿勢制御システムの自己修復まで、三分は必要との報告。アーマーの中の顔が引きつった。その間は飛行できない。

確実に狙い撃ちされるわ……計算が間に合わなければ……。

グランド・ゼロが銅鑼のような高笑いを放った。

「どうだ。俺の花火はきついだろう。それでも、まだお遊びだ。つぎは本気でいくぜ」

人間爆弾の突起にまた光球が生まれる。球の輝きも直径もはるかに大きいものだ。

まともに受ければ、アーマーも中の肉体も致命的に破損すると、ナノモジュールの計測

結果が出る。
　同時に、脳の別の部位で進行していた計算が終了した。
「喰らいな！」
　グランド・ゼロの身体から強烈な光球が離れる。だが。
「なんだと⁉」
　光球が、突起から数センチ離れたところで停止した。グランド・ゼロは驚いて動かした腕を、いかつい顔を蒼白にしてピタリと止めた。自分の身体が触れても、爆発は起こるのだ。それに一度放った光球は、爆発しないかぎり消えない。
「なんだ、これは。どうなっているんだ！」
「あたしの空間固定フィールドで、あなたを包囲しました」
　空間固定フィールドもまた、父の発明品を静子が完成させたものだ。特殊な物理的操作をすることで、空間そのものを疑似固体化させるシステム。その複雑な本質を、言葉で語ることは不可能だ。ナノモジュールによる計算のみで表現できる現象であり、把握できるのはこの世で静子だけしかいないだろう。
　空間固定フィールドの投射をグランド・ゼロの周囲にロックオンするだけでも、攻撃を受け続けて時間を稼ぐ必要があった。

「動かないでください。あなたを傷つけたくはありません」
「くそったれが！　俺が女の言いなりになんぞ、なるか！」
「あ、だめです」
キレたグランド・ゼロが自分から空間固定フィールドにつっこんだ。自分自身の光球が、閉ざされた狭い空間の内側でいっせいにエネルギーを解放した。

☆

サンシャイン60と平行して落下するオセロットは、高速で呪文を唱えた。背中の毛皮の黒い斑点が蠢き、表面から大きな鳥の翼が広がる。
オセロットは背中から現れたコンドルの精霊の名を呼んだ。
「エリザベート、飛べ！」
コンドルの足がオセロットの肩をつかみ、力強く羽ばたいて上昇する。
水柱の上に立つタイドプールが興味深げに目で追った。
「なるほど。さすがも魔法系のオフビートか」
オセロットはタイドプールに向けて両手を向けた。
「サルマ、ミカエラ、やっちまえ！」
右手の甲の豹紋から、緑色に輝く蛇の精霊が飛び出す。麗のアナルを二度の絶頂に導い

た小さな姿ではなく、牛を呑みこめそうな大蛇だ。
左手からはピューマが飛ぶ。
「馬鹿め。水そのもののおれに、動物の牙がなんの役に立つ」
水柱が物理法則を無視してぐにゃりと曲がった。タイドプールのほうから、蛇とピューマ、コンドルとオセロットへ、どっとなだれ落ちる。
「ミャアアアガボゴボゴボ……」
オセロットを呑んだ水柱が崩れ、サンシャイン60前の道路で巨大な水の半球と化した。水に呑まれて、コンドルも蛇もピューマも消える。本来所属する精霊界へ送り返されたのだ。
水の檻の中でもがくオセロットの目の前で、大きな泡がいくつも発生した。
「⁉」
泡が弾け、中から鮫が何匹も出現した。見せつけるように牙を剥き、オセロットのまわりをぐるぐると回遊しはじめる。
手足をばたつかせるオセロットの耳に、水を伝って明瞭に人間の声が聞こえた。
「おれがタイドプールと名乗る理由は、身体の水の中に、海の猛獣を召喚できるからだ。陸の魔法使いのおまえには、手も足も出まい。覚悟して鮫の餌になるがいい」

「やーだね」
オセロットははっきりと水中で言葉を発音した。水が驚きに揺れる。
「なぜ、おまえも水中でしゃべれるのだ」
「ばーか。ボクは南アメリカの精霊長老会議から、三百年にひとりの逸材として選ばれた精霊使いだぞ」
「それが、どうした」
鮫の群れが円陣を崩した。大きく口を開き、オセロット目がけて殺到する。
「出てこい、アマゾンの精霊たち！」
オセロットの全身の斑点が同時に蠢いた。オセロットの胸から、背中から、腹から、尻から、腕から、脚から、しっぽから、黒い泥水が噴出して、襲いくる鮫たちを包みこんだ。黒い泥水の中から、すぐに赤い色が染み出してくる。鮮血だ。鮫の血があふれ、鮫の皮や肉の破片がくるくると舞う。
自身の中の異変に、水がわめいた。
「ピラニアだと！」
泥水と見えたのは、無数のピラニアの大群だった。アマゾンの肉食魚は、鮫の巨体にびっしりとたかり、瞬く間に骨格標本にしてしまう。その骨すら、つぎの数秒で粉砕され、食

べつくされた。
「こんな馬鹿な。おれが召喚した鮫が食われるなど、うげがガガアアアア！」
ピラニアが泳ぎまわる水の中に、苦痛の声が轟いた。
「見ぃつけぇたミャア！」
黒いピラニアの渦にまぎれて水中を移動していたオセロットが、自分の右手につかんだものに向けて吠えた。
「世界一の精霊使いの目はごまかせないぞ。タイドプールの本体は、これだミャア！」
オセロットは右手の指に、珊瑚で造られた小さな人形を握っていた。
「おまえは水に変身できる人間じゃない。まわりの水を、自分の身体に見せかけていただけだ。本当のおまえは、この呪術人形に封印された魂にすぎないんだ。これで、おとなしくしてもらうぞ」
指を開くと同時に、一匹のピラニアが人形を呑みこみ、オセロットの手の斑点の中に消えた。
巨大な水玉が魔法の表面張力を失い、一気に弾けた。大量の水が道路を流れていく後に、全身の獣毛から水滴を滴らせたオセロットがふんぞりかえって立っている。
「牢屋に戻ったら、解放してやるミャア」

☆

「……あん、ん、いけませんわ……こ、こんな町中で、はあっ、だめっ！」

スターサンダーは背後からアイアンカーテンに抱きすくめられ、豊かなふくらみの半分を露出した乳房を、十本の鋼鉄の指で揉みたてられていた。

生きた鋼鉄の両手は、道路のアスファルトを引きはがし、街灯を殴り折り、バスを軽々と放り投げた豪力とは思えない繊細さで、柔らかい肉球をうねうねと変形させ、人差し指でコスチュームの上から乳首を嬲り続ける。

「ん、んう、もう、やめて、やめてください、あはあ……」

「冗談じゃねえよ。こんなに揉み心地のいい胸は初めてだ。ずっと揉んでいたいぜよ。さあ、兄貴もスーパーヒーロー様の身体を好きにしてやれよ」

アイアンカーテンの腕の中で、スターサンダーはいやいやと豊満な肢体をくねらせる。

「だ、だめですわ、うっんっ、そんな、二人がかりで責められたら、ああ、わたくしは、もう……」

「うるせえよ。兄貴に少しでも電撃を浴びせたら、おまえの心臓をひねりつぶしてやるから、おとなしくしてろよ」

「は、はい……」

コールドウォーの覆面の中で、青い目がねっとりと笑った。筋肉質のくせに脱毛処理したようにつるつるの両手が、スターサンダーのハイレグの股間にのびる。
「オレの愛撫は冷たいぞ。愛液が凍る寸前でもてあそばれると、女はヒイヒイ泣き叫んでやみつきになりやがる」
指が、スターサンダーのコスチューム越しに女の秘部に押し入った。
「んうっ！」
微細な電光が三人の間に走った。男たちの身体から、スターサンダーの肉体へ向かって。
アイアンカーテンとコールドウォーの指の動きが止まった。
「な、なんだ。身体が動かねえよ！」
「この女、なにをしやがった！」
二人の人間兵器は彫像のように固まり、身じろぎもできない。
スターサンダーの上気した顔に、慈しむような笑みが浮かんだ。
「女の、ひ・み・つ、ですわ」
わたくしの奥の手ですものね。誰にも教えるわけにいきませんわ。わたくしが他人の神経パルスを吸収できるなんてね……。
スターサンダーの超能力は発電するだけではなかった。周囲の電気の流れを自由に操る

ことができるのだ。人間の身体が自分の思うとおりに動くのは、脳の出した微細な電流が神経を伝い、目的の筋肉を刺激して収縮させているからだ。スターサンダーは直接他人の肉体に触れることで、相手の神経パルスを筋肉に届く前に吸収できる。相手は動くことは物理的に不可能だ。

「電気を使うオフビートを何人も知っているが、感電もさせないで動きを止めるヤツなどいないぞ！」

「お褒めいただいて恐縮いたしますわ、コールドウォーさん」

「きさま、このために、わざとオレたちに捕まって胸を揉ませたのか」

「もちろんですわ。それでは、おしまいにいたしましょう」

右手がコールドウォーの頭に、左手がアイアンカーテンの頭に置かれた。

ただ手を触れているだけなのに、数秒で二人の意識が遠のいていく。

細胞に酸素を運ぶ赤血球は、鉄をたくさんふくんでいるので、電気で誘導できる。スターサンダーは脳内の赤血球を減らして、脳を酸素不足にしているのだ。

「しばらく気絶しますけど後遺症はないので、お二人とも安心してくださいね」

「やめろ！　やめるん……」

「やめやがれ……」

ブラックマイトは現在のジャスティス・サーカスのメンバーのひとり。
もともとは太平洋戦争中に、ある科学者が対米決戦兵器として軍に売りこみ、開発費を出させて製作したロボットだという。ところが科学者はロボットが完成すると、軍に渡さないで逃亡したのだ。
科学者は密かにこつこつとロボットの改良を続け、人工知能が人間同様の意志を持つまでに至った。残念なことに科学者は国際犯罪組織秘密の謀略（シークレットカバル）に殺され、ブラックマイトはともに組織の日本支部を壊滅させたジャスティス・サーカスに身を寄せたのだ。
麗は正義のロボットに向けて、フレアが行方不明になった状況を説明した。
「危険なものを感じますの。ジャスティス・サーカスの情報網の協力を、どうかお願いいたします」
「承知シマシタ。正規団員（アクティブメンバー）ト予備団員（リザーブメンバー）ニ緊急連絡ヲトリマス。フレアサンハ無敵デスカラ、キット心配ナイデスヨ」
ブラックマイトの眼がやさしげな青い光になって、通信は切れた。

★

妹の淫乳に白く染まった燦の身体を、ジョイ・ディヴィジョンが濡らした布でていねい

にぬぐった。
顔やフレアのコスチュームはきれいになった。しかし胸を触られると、燦はまた甘い声を上げてしまい、背筋を震わせ、乳首の先端から白い液体を垂らした。おかげで胸のまわりだけはいつまでも乾かない。
それでも快楽に濁った意識が正常さを取り戻すにつれ、四肢を拘束されて、胸を嬲られ、強制的に絶頂を迎えさせられたくやしさが身を焦がした。
そして、それこそがドクター・ディスオーダーとジンが望むものだった。
「今度は、胸を揉まれるよりも気持ちのいいことをしてあげるわン」
喉の中でタンバリンを転がすようなジョイの笑い声が、燦の耳たぶをくすぐる。コスチューム越しに微妙なタッチで唇が背筋を這い下りていき、スカートのすそがまくり上げられた。白い布に包まれた、みずみずしい美尻があらわになる。
燦はジョイの意図に気づき、恐怖の悲鳴を上げた。
「や、やめて！　そこはだめ！」
「あらあらン。燦ちゃんたら、なにをされるか、わかってるのねン。エッチなんだからン」
ジンのクスクス笑いの吐息が、燦の本来人目には触れない部分にかかる。
燦は、麗と暮らすおかげで、アナルセックスを知識として知っている。悪いことではな

いとも思っている。しかし、現実に自分が肛門を、それも憎むべき敵に嬲られると思うと恐怖に囚われてしまう。

なによりも恐ろしいのは、先刻の胸への責めと同じに、また自分が快楽に悶え狂ってしまう姿が見えることだ。だからこそ、叫ばずにはいられない。

「やめて。そこには触らないで！」

「初めてだもんねン。不安にならなくてもいいようにしてあげるわン」

尻の位置から聞こえる声とともに、パチッと勢いよく指を鳴らす音が響いた。

すると、燦の顔の前の空中に、楕円形の鏡が現れた。どこかの金持ちの家の鏡台からはずしてきたかのような豪華な縁飾りがついたものだ。

鏡はなんの支えもなしに空中に浮いていて、微動だにしなかった。不思議な光景に、天才科学者であるドクターも、ほう、と感嘆の声を洩らした。

まさにアラブの精霊の魔法がなせる不条理である。

燦も目を見張って、空中の鏡に映る自分の顔を見つめた。同じ魔法系オフビートのベルには、こんなことはできない。ベルができるのは自然の精霊の召喚だけ。人工物を出すのは不可能だ。もっともこの鏡が、本当の人工物なのかも怪しいが。

鏡に映る燦の顔が、捕らわれの牝奴隷から敵を分析するスーパーヒーローになる。だが。

「なっ！」
向かい合っている顔が消えた。
代わりに鏡面に現れたのは、汗に濡れた白い布に包まれた女の尻。
鏡の中の尻たぶにジョイが笑顔を寄せ、クイクイと頬ずりをする。
「ひ、ああっ！」
はっきりと燦の尻たぶに奇妙に心地よい感触があった。
（間違いない……鏡に映っているのは、わたしの……）
燦の心を読んだように、鏡の中のジョイが舌をのばして尻肉の盛り上がりを舐める。
「そうですわン。自分のお尻が犯されるところをきちんと見られて、燦ちゃんもとっても安心できるわねン。ほらほら、よーくご覧になってン」
ジョイの手がひとなですると、コスチュームのスカートはそのままに、尻や股間を覆う白布だけがはらりと落ちた。露出した美しい尻たぶが、ジンの指で左右に割り開かれる。
「ああっ、いや、いやあ！」
燦の顔が羞恥に真っ赤に染まった。眼前に、燦本人が一生目にすることのないはずだったものが現れたのだ。
汗に潤った肉の谷間の底に息づく、美しい蕾。繊細なしわが集中する、可憐なすぼまり。

顔をそむけたいのに、できなかった。はっきりとわかる。燦のイメージとは異なり、蕾はいまにも開花しそうに内側から盛り上がっている。
（昂ってる……わたしの、いやらしく興奮してる……やっぱり、わたしの身体は、いやらしく造られているんだ……）
「わーお。燦ちゃんの肛門、すごくきれいだわン」
「当然だ。儂が製造したのだからな」
「わたしの方がきれいです、お父様」
と、三人が燦の背後にまわりこみ、勝手な論評を加える。あまりの恥辱に、燦は全身をふるふると震わせ、手足の鎖を連続して鳴らした。
「やめて、やめてやめてやめて！　そんなこと、言わないで、ひあっ！」
尻肉に、ジョイが顔を埋めた。肛門に唇が吸いつき、とがらせた舌先が蕾の中心をつつく。
「あ、あっ、くふっ……」
ジョイの顔がじゃまになってカメラを使っては絶対に撮影できない光景が、魔法の鏡に映し出される。舌がぴちゃぴちゃと音を立てて、すぼまりのしわの一本一本を執拗になぞり、溝を掘り起こすかのように蠢く様子がはっきりと見える。魔法の舌が動くたびに、乳

房を揉まれるのと同じ、いやそれ以上の鮮烈な快感の火花が、若い美尻の内部で飛び散った。

「はあっ、ああ、お尻、んっ、お尻は、いや……」

どうしようもできなかった。燦は甘美な喘ぎと屈辱の悲鳴を交互に上げながら、熱い疼きに襲われる尻を前後左右にくねらせ続ける。スカートがはたはたと閃く。

鏡の中では、凌辱されるアナルが嬉々として刺激に反応していた。唾液に濡れた舌先にノックされるたびに、肉の蕾がひくつき、すぼまりを開いてはジンの舌を咥えようとする。その動きのひとつひとつが悦楽の波紋を生み、燦自身を攻撃した。

別の生き物のように開閉する肛門の行動は、燦自身の意志では制御不可能な、卑猥で、淫らきわまりない肉体の反応だった。目に見えているために、いっそう恥悦が身体と心に刻みこまれる。

（ああ……いや、違う……こんなの、わたしの身体じゃない……こんないやらしいものが、わたしのお尻のはずがない……あ）

「あああああ！」

ついに、アナルが食虫植物の花のように舌を捕らえた。

「咥えないで、咥えてはだめえっ！」

われを忘れて声を発する燦の眼前で、嬉々として肛門がジンの舌を呑みこんでいく。ヌルリと体内に入りこんできた。
「あん、んっ、んんん……も、もう、だめ」
舌に侵される感触が、燦の限界を越えさせる。胸を責められたときと同じく、燦は自分の誇りも意地もプライドもだいなしにしてしまう言葉を鳴いた。
「いいっ！　気持ちいいのっ！」
ビクッと高く跳ね上がる尻の中に、ねっとりした液体がとろとろと入ってくる。ジョイが舌をストローのようにして、器用に唾液を肛門の中に流しこんできているのだ。
「は、はあ、ああ、あ、お尻が、お尻がああ……」
ジンの体液に触れた燦の腸粘膜が、妖しく解きほぐされていく。
「いやあ、わたしのお尻が、別のものになるう！」
「違うぞ。それが燦の本来の尻なのだ。普通の女なら、初めてアナルに異物を挿入されかければ、無意識にきつく閉じて抵抗するものだ。だが、燦の尻は最初から挿入を歓迎するように造られている。涎を垂らして異物を受け入れ、快感を生み出し続ける淫猥な性器こそが、燦の真実の尻だ。燦の尻は、嬲られて喘ぎ、貫かれてよがり、犯されて悶え狂うために存在するのだ」

「違うっ！　違う違う、わたしは、あうっ、いい、はひっ、中で、お尻の中で舌が動く、動くのっ！　気持ちいい！」
アナルに舌を差しこんだままのジンが、いったいどうやっているのか、明瞭な言葉を発音する。
「ジョイちゃんの舌は、そこらの人間とはできが違うわン。ほらあン」
「ひああっ」
肛門から舌が引き抜かれた。燦の目の前の鏡の中で、愉悦の熱に染まる燦の顔を舐めるかのように舌がはためいた。
「ひいっ、そんな」
無敵のスーパーヒーローが恐怖に駆られて悲鳴を上げた。
鏡の中で、ジョイの舌がカメレオンのようにのびたのだ。しかも、舌の表面に不規則な形の凹凸が現れる。
奇怪な責め具と化した舌が別の生物のごとく蠢く姿は、ジョイ・ディヴィジョンの顔がアイドルさながらの愛らしいものだけに、よりいっそうおぞましく見える。
この世のものならない化け物への嫌悪に、燦は生まれて初めて鳥肌が立ちそうになった。
「だめ。そんなもの、入れられたら」

ジョイが得意げに長い舌をうねうねと波打たせた。
「とってもたまらなくなるわン。その昔のアラビアのカリフもスルタンも、みんなみんな、これで悶絶したわン」
「燦も尻でイクがよかろう」
「待って、お父様。わたしにもください。エクリプスのお尻も愛してください」
エクリプスは父親に背を向け、尻の谷間に潜りこんだエナメルのTバックを取りはずした。自分の尻肉に指を食いこませて谷間を大きく割り開くと、さらけ出された自身の股間を、ことさらドクターに見せつける。
「ほう。恥知らずにもしっかりと濡れておるな」
「もちろんです。お父様に見られただけで、エクリプスは蕩けてしまいます」
エクリプスの指が自身の秘花から女蜜をすくいとり、ひくつく肛門に塗りこむと、肌色のすぼまりをしっかりと揉みほぐした。
「あん、うっんん……お父様、くうん……早く、エクリプスのお尻を犯してください、はああ……」
ドクターの機械の目に、欲望がきらめく。
「よかろう。エクリプスよ、姉のとなりに並ぶのだ。尻は自分で広げたままにしておけ」

「はい、お父様！」
エクリプスは顔を輝かせて吊るされた姉の左に並んだ。
肩の骸骨型のプロテクターをぶつけられて、燦の身体が大きく揺れる。
（エクリプスは、わたしに嫉妬してるんだ……）
鋭い視線を浴びせてくる妹の顔に、燦は燃え盛る炎を読み取った。
（ドクター・ディスオーダーの欲望がわたしに向けられることに嫉妬して、不安になっている……）
当のドクターがエクリプスの背後にまわり、白衣の中から新たなマニピュレーターをのばした。細いコードに歪んだ小さな球が数珠つなぎになって、うねうねと振動するというしろものだ。ジョイの変形した舌にも形が似ている。
またジョイの指が鳴った。燦の前に浮かぶ鏡が一瞬で横幅を広げ、燦の尻のとなりにエクリプスの尻が映る。ともに官能の汗に覆われた二つの尻は、やはりよく似ていた。燦もエクリプスも顔は日本人だが、尻はつんと高く持ち上がった西洋人タイプ。一人のマッドサイエンティストの性欲に忠実に製作されている。
鏡の表面で、妹の尻が自身の両手によってさらに大きく割り開かれ、『の』の字を描いて父親を誘った。燦と同様に、肛門がせわしなく広がり、またすぼまる動きを繰り返す。

燦と違って、エクリプスが意識的に動かしているのだ。
　そのあさましく見える姿態に、燦は胸を締めつけられる。
（わたしに父親を取られないように必死だ。エクリプスにも心はあるんだ。自分を造った男を真剣に愛している。でも、それは無意味なんだ。どれほど愛情を向けても、ドクター・ディスオーダーには他人の思いに応える心など、かけらもありはしない。ヤツの目には、わたしもエクリプスも、いや、この世界そのものがおもちゃとしか映ってない）
「はあうう！」
　燦の痛切な思いも、激烈な快感にかき消された。のけぞる燦の視界に、赤い火花が飛び散った。不本意な歓喜の炎の向こうの鏡には、自分の肛門にジョイの異様な舌が一気に潜入する光景が映る。舌の表面についた唾液がアナルの入口でこそげ取られ、たらたらと滴り落ちた。
　わずかに遅れて、振動するアナルビーズがエクリプスのアヌスに押し入れられた。
「あっくうう！　いいです、お父様あっ！」
　ドクターとジョイが顔をニンマリとさせ笑みを交わす。
「ジョイ・ディヴィジョンの魔法の力と儂の科学の力の、どちらがすぐれているのか、競争だぞ」

「おもしろいわン。先にイカせた方が勝ちだわン」
姉妹の美尻の中で、魔法の舌と機械の腕が蛇のごとくくねり、振動を強くする。
「はあっ、んつっ、いや、いやあ、気持ちいい、ううんあっ……」
「あふ、ふうう、あっはあ、いい、いい、よすぎるう……」
絶え間なく踊り続ける淫らな責め具に、燦は熱く濡れた喘ぎを吹き出し、手足の鎖を引きちぎらんばかりに悶え狂った。燦が立っていられるのも、空中に拘束されているからにすぎない。
「ふあっ、だめ……お父様、もう、立っていられません、ああふっ！」
エクリプスは肉悦に尻を蕩かされ、自分の尻たぶを押さえる姿勢を保持できなくなった。腰が砕けて、無意識に燦の身体にしがみついてしまう。妹の体重がかかり、燦の両手に手枷が食いこむ。
汗で濡れた身体と身体がぬるっと密着した。燦のずっと張りつめたままの胸を、妹の支えを求める指がきつくつかむ。エクリプスの乳房も、姉の身体に押しつけられて柔軟に形を変える。
ぷしっ！　と、ほんの少し前に耳にした音が胸で鳴った。
燦のしこった乳首から再び淫乳が噴き出し、妹の指の間から前へ飛んだ。エクリプスの

くにゃりと曲がった乳首も、姉の身体に乳白色の体液を滴らせる。
「ひい、また胸、だめ、あっはあ……」
「あおお、おっぱい、また出てる……」
一度絶頂を迎えた胸は鋭敏になり、他の性感帯への刺激にも反応して、大きな乳房の中に淫乳を溜めるようだ。少しの接触で、燦もエクリプスも射乳してしまう。
乳房を直接責められての絶頂ほど快感は激しくないが、やはり射乳とともに愉悦が左右の胸の中で弾け、脊髄を尻へ向けて降下していく。胸と尻で生まれる歓喜が融合し、反響して、再び胸へと戻っていく。また間欠的に淫乳が出た。
姉妹の父親が、休みなくアナルバイブで妹を責めたてながら、いかにも新しいお菓子を発見した子供のように命じた。
「よしよし。エクリプスよ、燦にキスをして、胸を愛撫してやれ」
エクリプスの美貌が嫉妬の苦悶に歪む。
「いやです……あふ、こんなお父様を裏切った女とキスをするなど……ん、んうふ、わたしにはできません」
「めでたく燦は戻ってきたのだ。家族は仲良くせねばならん。キスをしろ。胸を揉め。さもないと」

いきなりドクターの声が酷薄な色に染まる。
「は、はい、お父様、わかりました……」
エクリプスが凄絶な顔を、姉に向けた。自分よりも先に父親に造られた者への羨望。父親を裏切った者への憎悪。裏切ったにもかかわらず父親から求められていることへの嫉妬と焦燥。無数の感情が混濁して、燦へ向けられる。
「おまえなど、いますぐわたしの手で、あ、あくっ、あああ……」
エクリプスの尻から、バイブが引き抜かれはじめた。
鏡に映る尻から不規則な形の球が振動しながら現れ、肛門の縁をめくった。広げられたアナルから透明な粘液がとろとろとあふれ出てくる。腸の粘膜から分泌される腸液のはずだが、普通の人間より量が多い。球が完全に外へ出ると、アナルはキュッと閉まるが、またつぎの球に押されて、震えながら口を開いていく。
並んだ燦の尻も、同じ動きを繰り返した。ジョイがドクターにならって舌をゆっくりと引きずり出したのだ。
「はん……ああ、お尻っ……だめ、あうふっ……」
左右に振りたくられる燦の頭の髪を、エクリプスの指が引き抜かんばかりに強く握りしめた。

「おまえを、んんく、引き裂いて、やりたい……はあっ、けれど、お父様のお望みだから」
「やめろ……う、あ、おまえと、キスなんか、うん、むうう……」
燦は顔をそむけようとしたが、超人的筋力を奪われたいまでは、エクリプスに抵抗することは不可能だ。妹の唇が、姉の唇に押しつけられる。
「んんっ……む、うう……」
「んくう……んふ、むむ……」
姉妹の尻に、ほとんど引き出された舌とバイブが再び奥深くまで押し入れられた。
「んぐうっ！」
「おむむう！」
下半身から高波のように襲ってくる快感をぶつけ合うかのように、燦とエクリプスは無意識に舌をからめる。
「くうん……っふう……あぐっ……」
「うくう……あむん……つうっ……」
肛門に激しく出入りする責め具に操られて、姉妹は右に左に顔を傾けて、舌をより強くからめ合う。互いの口を吸い合い、唾液を混ぜ合わせて飲み下してしまう。唇の隙間から、飲みきれなかった唾液が涎となって流れ、顎から胸へ落ちた。

ディープキスに耽溺する姉妹の間で、豊乳が押しつけられ、四個の柔肉の球が大きく広がった。燦の変形した胸が、エクリプスの両手に容赦なくつかまれる。おそらく普通の女なら乳房がつぶされる握力だ。だが、いまの燦にとってはたまらない快楽を生み出す刺激になる。

「んんんくうっ！」

左右の乳首から淫乳がどっとあふれ、密着する妹の乳房との間から白い噴水となって周囲に飛び散った。燦が身をのけぞらせると、エクリプスの胸も圧迫される。

「はうっんんっ！」

姉同様に射乳する。二人の淫乳が混ざり、白い噴水の勢いが倍加した。たちまち燦とエクリプスの顔や髪が、自分たちの体液で白く染まった。

連続する射乳が、尻の肉悦をどんどん深くする。直腸の中で暴れる淫具を、より鮮明に感じさせる。恥辱のときが迫っていると、燦は直感的に知った。

「ああっ！　いや、イキたくない！　うっんん、お尻なんかで、イキたくない！」

「イカせて！　ひい、お父様ので、エクリプスを先にイカせてください！」

「よしよし。エクリプスよ、イクがよい」

「あらあらン。燦ちゃん、負けちゃだめン」

いままで以上に速く、強く、腸粘膜を引きずり出す勢いで、同時に責め具が抜かれる。二つのアナルがそろって腸液を噴いた。
「ひっ、ひいいいっ、イク！　お尻が、お尻がイクう！　いやああ……」
「イキます、お父様あっ！　ア、アナルう、最高です！　イクイクうっ……」
姉妹の胸の白い噴水が、ひときわ高く立ち昇った。自身の射乳を浴びて、燦はがっくり頭を垂れた。エクリプスも姉の身体によりかかって、かろうじて脚を支えている。
だが、マッドサイエンティストとジンはまだ容赦しなかった。一度完全に抜かれた責め具が、再び肛門にねじこまれる。力を失ったすぼまりが強引に開かれ、腸壁がけずられる。
「あううっ！」
「はくうっ！」
姉妹はさらに強く身体を押しつけ合い、乳首をこすりたてて、互いの淫乳を浴びながら、強制的に新たな絶頂へと追いやられていった。
「だめ！　ああああんっ、また、また、お尻、イッちゃう！」
「お父様！　くひい、また、また、肛門で、イカせていただきます！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌！

【偶数月】
隔月発売
2・4・6・8・10・12月

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌！

【奇数月】
隔月発売
1・3・5・7・9・11月

正義感に燃える少女達をたっぷり陵辱！ ヒロインのピンチ満載!!

【電子版】
毎月配信
書籍版は奇数月発売!

二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE

コミックUNREAL アンリアル
COMIC UNREAL

正義のヒロイン 姦獄ファイル
Justice Heroine Kangoku File

あなたのキモチイイをお手伝い！キルタイムのアダルトコミック誌

電子書籍版も好評発売中

全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中！

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:(03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索